

日中両国の多文化バラエティ番組が伝えた 相互イメージの分析と比較

MEI Ziyu

近年、グローバル化の進展によって国と国との繋がりが一層強まり、インターネットや SNS の普及による外国との民間交流が盛んになり、また、海外旅行や海外留学と海外住民の増加によって、多文化バラエティ番組からハードな話題がなくなった。日常的で、ソフトな外国イメージを知りたい視聴者が増え、番組における論戦が減り、国々の「交流」、「繋がり」、「共通点」を更に探り出す傾向がみられるようになった。そして、最近の多文化バラエティ番組における外国人出演者による激しい論戦が見えなくなった代わりに、外国人出演者がお互いの情報を交換したり、日常生活を語ったり、笑いを作ったり、などの場面が多くみられる。このような斬新なバラエティ番組が視聴者に広く受け入れられ、人気を獲得していることがわかるだろう。

多文化バラエティ番組はかつて、偏見やステレオタイプを生み出すとされてきたが、国民にとっては外国を理解する役割を果たしている。本論文の目的は、従来のマス・メディアにおける日中の相互イメージの研究・調査の補強として、増加が著しくなっている多文化バラエティ番組による新たな日中間の相互イメージを明らかにすることである。そして、両国のフォーマットが近い番組からその新たな日中間の相互イメージを分析し、比較する。

比較対象に日本と中国を選んだ理由として、日中のマス・メディアにおける相互イメージは多くの研究・調査で注目され、その相互イメージの新しい発展は注目すべきであると考えたことが挙げられる。また、中国と日本は同じ東アジア文化圏に位置し、文化の類似点が存在し、テレビ番組においても、似たような人気多文化バラエティ番組が制作されており、相互に共通する点もみられているからである。

多文化バラエティ番組は「楽しい」特質をもつため、本論文の調査の中心は「楽しい」番組である上に、ポジティブでソフトなイメージを作り上げていることを検証することであり、本論文の主な柱である。

本論文の仮説に応じて、まず調査結果を得るために必要な項目を以下の通り設定した。まず(1)トピック、(2)出演者、そして(3)相互イメージ、これらの三つの検証項目をコーディングし、数値化してまとめて提示した。対象番組は日本の「世界番付」と中国の「非公式会談」である。

本論文で対象とした日中両国の番組にかかわる調査結果を見ると、それぞれの多文化バラエティ番組におけるトピックスはそれぞれ差があるが、いずれも共通して「娯楽的」、「日常的」なトピックが多く設定される傾向がみられた。

また、出演者イメージがどのように視聴者に描かれるかという、いわゆる立体化に関する視点では、番組形式によるイメージ創造の豊満さが影響していると考えられる。例えば、中国の「非公式会談」では自由な議論が許されている。そのため、出演者がかなりの量で発言することにより、ある特定の国や国民に対して抱く個人が受けるイメージも立体化していく。それに対し、日本の「世界番付」では、番組中の司会者が個別に対個人関係の延長線上にある「指名発言制」となっており、(1)出演者の発言内容、(2)発言回数の制限、それとともに(3)出演者のイメージが固定されることに繋がる。

本論文における日中両国の相互イメージに関する調査結果について、日本の「世界番付」では、番組そのものとその出演者の両方において、中国・中国人イメージに関して、ネガティブで非好意的なイメージが多かった。それに対し、中国の「非公式会談」では、番組による日本・日本人イメージがややネガティブで非好意的な傾向はあるものの、番組中の出演者を通じて描き出された日本・日本人イメージについては多数のポジティブで好意的なイメージがみられた。

結論として、日中両国の多文化バラエティ番組視聴者の対日本・日本人、または対中国・中国人に対するイメージや価値観は、それぞれの社会が抱える社会背景や状況に影響されていることを改めて認識するとともに、本論文調査研究で得た知見は巨大なメディア現象の渦の中の一部であることも覚え、その上で本論文に連なる日中の国際比較研究が続いてくれることを期待したい。